

巻頭言

吉田 正生

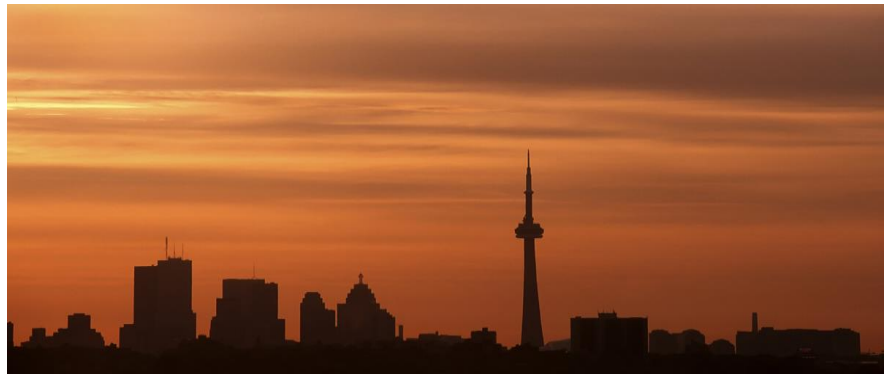
研究室の窓からみえるスカイツリーがずいぶん高くなってきました。月日の経つのは早いものだなあと思う一方、みなさんもあのように着実に天に向かって伸びているんだなあと思われました、4年生の卒論を読んで。……そして3年生の場合には、「社会科論を学んで」という文章を読んで。

「社会科論を学んで」という文章を読んでいちばんうれしかったのは、みなさんが一様に、これまで社会科について深く考えたことなどなく、教師になるためには学習指導要領を小器用に教えるための知識と技能さえ身につければいいだけと考えていたけど、それが大きく変わったという意味のことを書いてくれていたことでした（ただ、その割には、私のゼミ生の試験の点数はよくなかった。まあ、テストの点数は確かによくなかったけど、一つの姿勢を生み出すことができたわけですから、みなさんがこれから大きく伸びてくれるものと信じています）。

閑話休題。みなさんが若々しく伸びていく時期にあるのに対して、私などは「喪失期」にあると感じさせられています。肉体的・精神的な喪失という意味よりは、「社会的喪失」とでも言ったらよいのでしょうか。

2年ほど前に、小学校時代の恩師が亡くなりました。結婚式にも来ていただいた方で、私はその先生にかわいがられたという思いがあります（エコヒイキされたとは思っていません）。それと前後して、高校・大学と友人だった男が死にました。彼は私が北海道に行くということが決まったときにもう一人の高校時代からの友人と一緒に送別会をやってくれました。

その年の2月には、平成6年から飼っていた「プーチャン」というメス犬が死にました。2月の寒い朝のことでした。もう老衰して寒さに耐えられなくなっていたのに、私がまったくそういうことに無頓着であったため死なせてしまったのです。暖かい部屋の中で飼ってやれば、あと2～3年は生きたかもしれませぬ。享年16歳でした（人間の年齢に直すと70代半ばということになるのでしょうか）。下の娘が犬を飼いたいというので、「お金



のかからない犬なら良いよ。それから、お前が必ず、散歩をさせ、えさもやるんだよ。家の中に入れてはだめ。おばあちゃんが嫌がるからね」と約束をさせ、ただの雑種犬を隣町までサーフに乗ってもらいに行ったのです。娘は中学に上がると約束を破り、散歩は私の役、餌やりは家内の役になってしまいました。……プーは今、北海道の白い雪に埋もれて一人でさびしい丘の上に眠っています（レトリックではなく、ほんとにさびしいところなのです。旭川市といっても江丹別というところで、人間があまり住んでいないところだから。ここに比べたら、松伏など大都会です）。共同墓地みたいなところだから、私たちが墓参りに行けなくなっても、さびしくはないかもしれません。

さて、2010年の3月（だからおよそ1年前）には、私の母（「さっきの「おばあちゃんが嫌がるからね」のおばあちゃん」が、急死しました。まったく寝込むことなく、家内と私が外出先から戻ってきたら、もう死んでいたのです。急性心筋梗塞だろうといわれました。88歳でした。

もう、越谷に戻ってくるのが決まっており「また、3月に桜が見られるところで暮らせるんだね」といって喜んでいたのですが……。引越し支度でてんでこ舞いの中でのことでしたから、ろくな葬式も挙げられませんでした。近所の人が10人ほど、火葬場に一緒に来てくださり、家族だけの本当にさびしい骨拾いにはならなかったのが何よりの慰めでした。

手塩にかけて育てたゼミ生を北海道に残してこっちにやってきましたら、こちらのゼミ生の中にはライオン丸（ごめん、昔のことだから許してください）と熱帯インコ（ごめん、同前）がいて、「文教大学というところはもう少しましな学生がいると思っていたんだが……」とがっかりしてしまいました（まあ、今はこの落差は感じなくなりました。いまはお茶目通俗心理学者とツマラナ・ソーサンの方が心配です）。

2010年4月には、最初に仕えた校長（もう退職されて20年ほど経っていた）のところに挨拶に行き、なんか変な咳をしているなど思っていたら、8月になって奥様から電話がかかってきて、「主人が今危篤なの。まだ間に合うかもしれないから、野田の病院に来て」といわれ、駆けつけたら一足違いで息を引き取ったところでした。肺癌とのことでした。

この先生が、東葛地方出張所の指導室長をなさっているときに私の国語の授業を見ていただきました（3年生を担当していたと思います。このクラスもよく育てたので、授業中、常時12～3人の子ども、およそ3分の1の子どもたちが挙手をするまでに育っていました）。物語文の指導で、情景のイメージを膨らませて「豊かに読み取らせる」大変いい発問をちりばめた授業（だったはず）なのですが、一言もほめてもらえませんでした。

何しろ、新採のときから生意気で「こいつはだめだ」と思われていたからでしょう。いつかはほめられる授業をしたいと思っているうちにそういい機会がなくなり、とうとうお亡くなりになってしまいました。永遠に授業で恩返しすることができなくなってしまったのです。

9月には、身体に「教師力」を叩き込んでくれた校長先生が亡くなりました。この先生とはじめてお会いしたのは、私が経験4年目くらいで、向こうは2校目の教頭としていらっしやった学校ででした。ごみの拾い方、子どもへの注意の仕方、掃除のさせ方など、本当に基礎を学びました（教えてくれたわけではありませんが）。兵庫教育大学から帰ってきたときには、ご自分が校長をやっている学校に教師経験の浅い私を「学年主任」というかたちで呼んでくれました。信頼には十分こたえられなかったと思います。

野田に行って、教務主任をやっていたら、そこへまたこの先生が校長としておいでになりました。一人の管理職に3回仕えるというケースは珍しいといわれました。「よほど縁が深いんだね」と周りに言われたことを覚えています。

去年の6月にお電話して、「お宅にお伺いしたいのだけれど」といったら、「今は暑いし、庭の手入れをやっていたら体調を崩してしまったから、涼しくなるまで待て」といわれました。素直に待っていたら、亡くなってしまったのです。

そして12月には、私と2歳しか違わない「大変尊敬する、ある意味、兄貴みたいに思っていた」先生がなくなりました。こちらは大変急で、24日だか25日に奥様から突然電話がかかってきて「主人が亡くなった。お通夜が〇〇日だから、よかったら来て」といわれて、あまりのことに信じられない思いでいろいろなことを尋ねてしまいました。

この先生とは、不思議に馬が合い（周りからすると不思議な組み合わせだったようです）、利根川に雑魚獲りに行ったり（学校の水槽で飼うためです。お金をかけて買ってくるわけにはいきませんから）、職員室で馬鹿なことを話していたり、若い先生をからかっていたりしたのですが。野田の教育委員会に行くことが決まって7年生会で送別会をやってくれたとき、私が酔いつぶれ先生にタクシーで送ってもらったこともありましたが（翌日が下の娘の卒園式で、二日酔いと闘いながら椅子に座っていました。椅子に座る前は道端でゲボを吐いていました。）。先生が退職される1ヶ月ほど前には、用事を作り北海道から出てきて学校の中を案内してもらいました。植物が好きな方だったので、ご退職記念に観葉植物を贈ったことを思い出します。

私の教員としての骨格を作ってくださった方たち、そして自分を育ててくれた恩師や母を失ったということは、大きな「喪失」であり、もう自分がよほど気をつけていない限り、学ぶ相手・教えてくれる相手を失ったということになります。

……なんか、たそがれたことを書きました。藤沢周平の「たそがれ清兵衛」は、真田広之主演の映画の方がずっとよく、私はあれを見ていて、ラストシーンでは危うく涙が流れそうになってしまいました。

「人生、出会いを大切にしろ」というのが、最初に仕えた校長先生のわれわれ教職員に対する教えでした。若いときはあまり響かない言葉でしたが、年をとってからはつくづくそう思います。みなさんも、いろんな出会いを大切に、「喪失」の日々がなるべく遅くなるように、大切なこれからの人生を作っていくてください。

